K-840

長者屋敷遺跡

第2次調査概報

1980

長井市教育委員会

長者屋敷遺跡第２次調査概報

昭和55月３月

序

昨年度は本遺跡の性格確認の調査を実施し、本年は遺跡の範囲確認を中心にした調査が、実り多く終了できましたことは、偏に関係各方面の御理解・御協力とご指導の賜と感謝いたしております。

調査が進められてゆくにつれ、地域の人びとの中に遺跡についての理解と関心も漸次高まり、その保護と活用について、新たな認識がなされてきたことはまことに喜ばしいことであります。

「ふるさとづくり」を進める場合、ふるさとの個性に立脚しての活動が大切であると考えておりますが、ふるさとの個性の源泉は祖先の生活にあると思います。その理解が深まることは、新しい時代に立ち向う新しい姿勢がつくられているものと心強く思います。

本書は、本年度調査の概報でありますが、一つには今後の調査のご指導を受ける資料のためのものであり、二つには新に進められている第2 次の開発と遺跡の保護と活用についての調和を求めるための資料になればと願うものであります。

終りに、調査にあたって特にご協力を賜った土地所有者と地元の方がたに対して改めて感謝申しあげたく存じます。

昭和55年 3 月

長井市教育委員会

教育長　守　谷　辰　雄

目　次

Ⅰ　西根山麓における長者屋敷の位置

Ⅱ　遺跡の立地

Ⅲ　今年度調査の課題

Ⅳ　作業の計画と実施

Ⅴ　調査報果

Ⅳ　まとめ

Ⅶ　図版および写真

付図　1　長者屋敷遺跡 遺構配置図

2　縄文前期住居跡

3　弥生期墳墓跡

4　第1墓域

5　第4墓域

6　西根の遺跡と活用構想

写真

調査体制

- 調査主体

長井市教育委員会

- 調査指導

柏倉亮吉／山形大学名誉教授・県文化財保護審議会々長

小林達雄／国学院大学助教授

水野正好／奈良大学助教授

加藤稔／山形県立山形工業高等学校教諭

- 調 査 員

佐藤正四郎／長井市中央公民館長・県埋蔵文化財保護指導委員

佐藤鎮雄／南陽市立赤湯中学校教諭

海野丈芳／長井市立長井小学校教諭

鈴木和夫／長井市立西根小学校教諭

村上和雄／長井市教育委員会技師

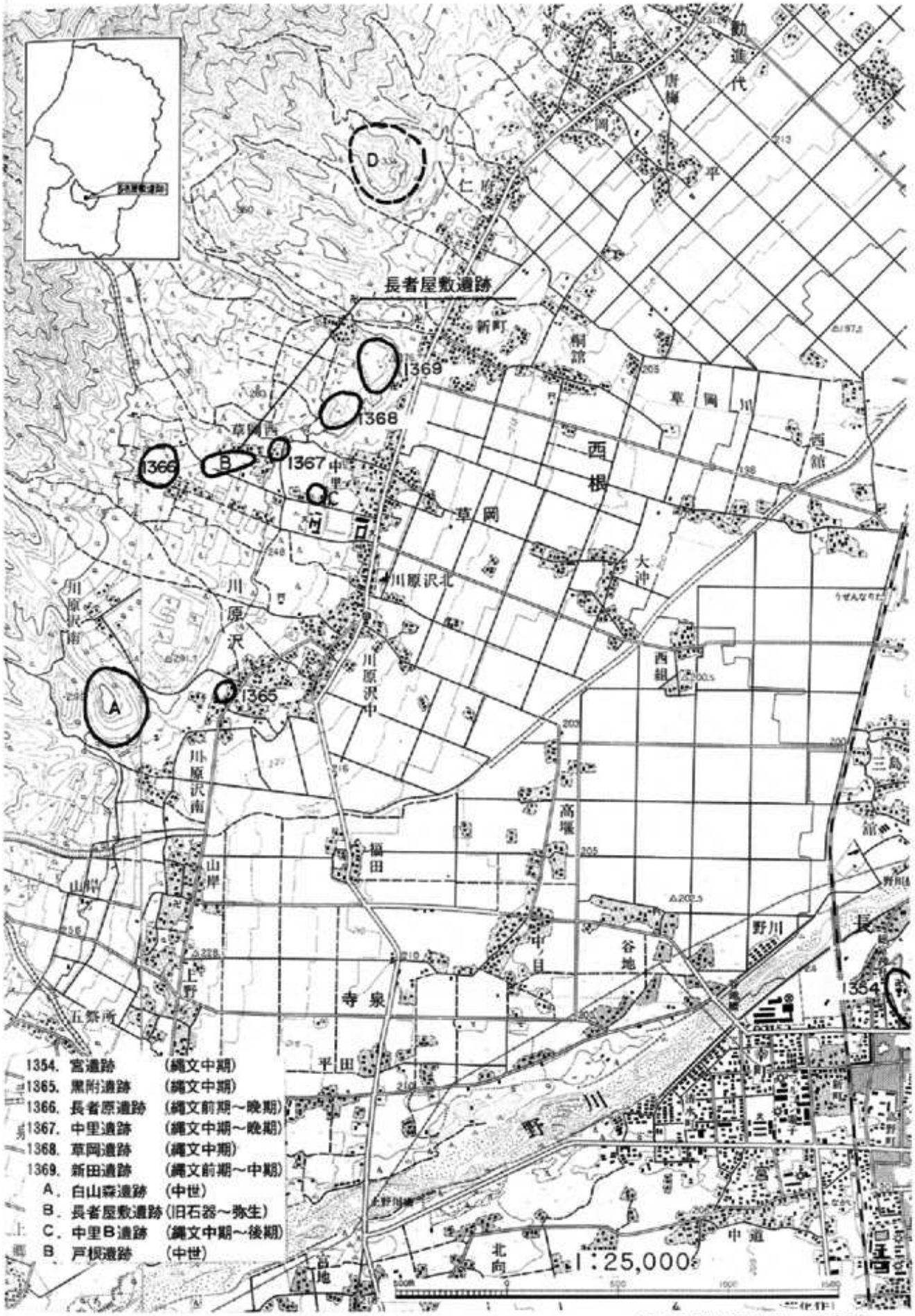
村上孝一／長井市宮605

- 調査補助

大瀧一利・安部和彦

- 調査協力

山形県教育委員会／置賜考古学会／遺跡土地所有者／長井市長者屋敷遺跡保存会／長井市草岡区会／長井市草岡生産森林組合／草岡区草西地区／山形大学考古学研究会会員／県立長井工業高等学校／地元学生・高校生／四釜工務店



1354. 宮遺跡 (縄文中期)
1365. 黒附遺跡 (縄文中期)
1366. 長者原遺跡 (縄文前期～晩期)
1367. 中里遺跡 (縄文中期～晩期)
1368. 草岡遺跡 (縄文中期)
1369. 新田遺跡 (縄文前期～中期)
A. 白山森遺跡 (中世)
B. 長者屋敷遺跡 (旧石器～弥生)
C. 中里B遺跡 (縄文中期～後期)
B. 戸根遺跡 (中世)

第1図遺跡位置・分布図

Ⅰ　西根山麓における長者屋敷遺跡の位置

〔発掘調査をする意味〕

西根地区の山麓一帯は古くから「土器や石器が多く出るところ」として知られていた。特に長者原地内は、方々から人々が入り遺物を採集したり、また多くの箇所が掘られたことがあったようである。

このような、埋蔵文化財の豊庫であったこの山麓台地は、戦後の急速に進展した開発の波に乗り、今ではブルドーザなどの大型機械により開田、開拓がなされてきた。そしてまた、汚泥客土のための採土や、林道の建設、宅地造成などによる新しい開発が既にはじまり更にこれからも続くだろうと思われる。高度経済成長と呼ばれた時代では、開発のために遺跡がこわされなくなってしまう事については（埋蔵文化財に対する理解や関心が低いために）さほど問題にされないできた。むしろブルドーザの爆音が社会の前進だとして喜ばれてきた一面もある時代であった。このようにして、今まで知られていた寺泉・大沢から勧進代・蔵京に至る、西根の山麓にある一連の遺跡の多くは、大きな破壊を免れ得なかった。

勿論人々が生活するために開発が必要なのは当然であるがそれと同時に、今生きてゆく人間にとって、過去をふりかえることもまた大切なことと思う。それは我々の祖先の生きてきた方法や技術・その社会生活を、この埋蔵文化財の理解をとおして新しい生き方についての認識を得られるからと思う。

我々は新しい時点における遺跡の保護と活用について改めて考えたいものである。

Ⅱ　遺跡の立地　　略

Ⅲ　今年度調査（第２次調査）の課題

本遺跡の範囲を確かめることを主題とし、そのために本遺跡の周辺の地形図を作り、遺跡の立地を確かめることの２点とする。

Ⅳ　作業計画と実施

１　地形図作成作業

本遺跡を中心にして隣接する遺跡（長者原・中里遺跡）を含めた500分の1の地図形を作

成した。(約500,000㎡)

2　範囲確認の調査

縦2.0m 横2.0m の正方形のグリッドを基本単位として、東西方向には幅4.0m長さ140.0m のトレンチを1本、南北方向には、幅6.0m、長さ36mの東部トレンチを1本、幅4.0m、長さ30m 、計3本のトレンチを掘り、遺構を確認する。

V　調査結果

1　地形図作成作業結果

(1)　旧石器の採集

測量作業中に粘性土の、丘陵地の畑地からエンドスクレーパー2点採集する。そこを長者原B遺跡とする。

(2)　隣接遺跡との関連

本遺跡の西部に隣接する長者原遺跡から、縄文時代中期及び晩期の遺物を採集したことにより、長者屋敷遺跡と長者原遺跡とは、一連の遺跡とみてよいと考えた。

また、本遺跡の東部にある段丘上の遺跡（中里遺跡）では縄文時代中期、後期および晩期、それぞれの時期の遺物を採集した。特に堀え内式併行の土器片が2点あったことは、数少ない後期の遺跡だけに重要な資料と考えた。さらに本遺跡と中里遺跡の中間の低地から、「こぶつき土器」の出土があったことは、遺跡の拡がりと年代的な層から考えると、貴重なものと思われる。

(3)　段丘の成因

測量の際の実地観察から舌状の台地は、湖成段丘として形成されたものであり、その下の台地は河岸段丘であることを確認した。

2　範囲確認の調査結果

(1)　遺　　構

①　縄文前期の住居跡　1棟を検出、縄文時代前期初頭のもので、大きさは 6.5m×5.5mで、平面形は台形の隅丸の住居である。この頃（縄文前期）になると気候も温暖になり、食物も豊富で、人々の生活が一段と進歩し、住居も大きくなり、そこに定住して集落をつくるようになったといわれるが、この住居跡もその集落の1つではなかろうかと考える。

②　玦状耳飾が出土した土壙墓

前期初頭の土壙（径95cm×75cm）で丸い形をなしている。直径2.7cmの円形の玦状耳飾が一組、その中から出土した。中国の玦に似た形をしているところから玦状耳飾と呼ばれている。玦状耳飾が初めて出土したのは大正年間、大阪の国府遺跡で一対となっての出土は神奈川の上浜田遺跡に次いで三番目である（富山の藤田富士夫氏）という。

女性の装身具としての玦状耳飾の由来や、それをつけた人はどのような人であったか、またその製作技法など興味深いものがある。玦状耳飾は各地で出土しているが特に北陸地方での出土が多い。

③　弥生時代の墳墓跡　2基

この墳墓跡は台地の東端の地区から検出した。周囲には溝がめぐらされており、その区画内には遺体を埋めたと考えられる土壙を確認した。その土壙の大きさは幅0.75m・長さ2.2mの長方形で南北方向にのび、2基検出した。双方とも形・大きさなどはほぼ同じである。周溝は幅0.2～0.4m 、南北方向4.0m 、東西方向2.8m の大きさで長方形。周溝部及び埋葬部の覆土は、軽くてパサパサしており何かを焼いたような黒褐色をしていた。

遺構の上部の層は、傾斜地の流土のため、判別が難かしく、結果として必要以上に削ってしまったので実際よりも浅くなってしまう。

この弥生の墳墓跡は方形周溝墓と関連を持つものかどうかはわからない。

④　その他の遺構

以上の他に、縄文中期および晩期のものと推定される住居跡の輪郭の一部を検出した。

(2)　南北方向トレンチで確認した主な遺構

○東部トレンチ

ほぼ中央部に縄文中期及び晩期の住居跡と考えられる遺構を確認したが、現時点では調査未了。

○西部トレンチ

墓域と考えられる遺構を4箇所確認し墓域を南からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳのナンバーを付した。

①　墓 域 Ⅰ

縄文中期のものと推定し、径約2.5mの大きさで丸い形状。この中に数箇の土壙が集中しており、その中に伏がめを伴う土壙もあった。

② 墓域Ⅱ

一部削りすぎたため、墓域の西側の部分しか確認できず。

③ 墓域Ⅲ

時期不明。

④ 墓域Ⅳ

縄文中期のものと推定する。形、大きさは縦・横6.0m の方形に近い形をしている。ここは、配石の多い集石の遺構で、その中は1箇所づつまとまりのある形状をしている。また埋めがめを3箇検出した。

この遺構は、さらに可能性としては、昨年検出した集石遺構が、本トレンチの西側の水田の下を廻り、ここにみられる集石遺構として出現したものと考えられる。

(2) 遺　物

① 遺　物

a）旧石器　ナイフ形石器……2

　　掻　器……2

b）縄　文

　早期　表裏縄文の土器片

　前期　羽状縄文の土器片／石器

　　玦状耳飾……2（蛇紋岩）

　中期　土器・石器

　晩期　ベニガラを塗pた土器

　　ベニガラを塗った石／土偶／土版

c）弥　生　土器片／アメリカ型石鏃

Ⅵ ま と め

1．本調査によって、旧石器から弥生に至る遺跡であることの確認ができた。その中で旧石器の出土した地点はキャンプサイトと考える。

　前期の住居跡は1棟だけであるが、台地の東半分の一帯で前期の土器片が出土したので、あるいは検出した住居跡のほかにも住居があり集落の可能性もあるのではないかと予測した。しかし遺跡の主体となるのは縄文中期と晩期と考える。

2．玦状耳飾の石材は蛇紋岩で、土壙墓から対となっての出土の意義は大きいと考える。

3．弥生期の墳墓跡2基の北側に更に別の墳墓も予想できた。方形周溝墓との関連はないという大方の所見であったが弥生期の墳墓の検出は貴重と考える。

4．西区トレンチで検出した遺構を墓域としたが、今後土壙を調査したうえで改めて検討したい。

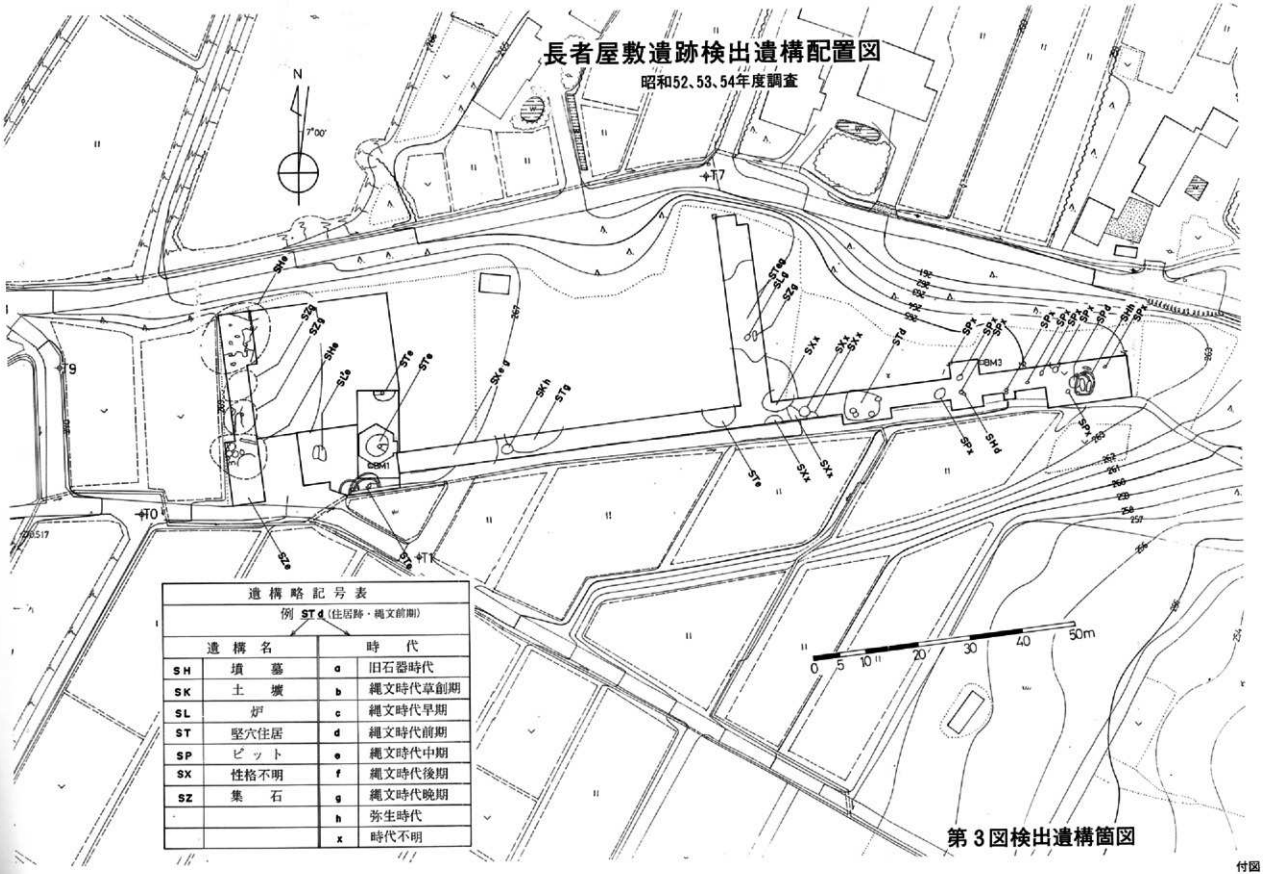
5．終りに、調査にあたってご指導いただいた関係各位に対し心からのお礼を申し上げ、更に土地所有者と地元の方がたに改めて深甚の謝意を表します。

長者屋敷遺跡関係年表

年代	時代区分		本遺跡から出土したもの	周辺の遺跡名	
	旧石器時代		杉久保型ナイフ（2つ） エンドスクレーパー（二器種）（2つ）	飯豊町・上原地 小国町・東山 長井市・長立	狩猟採集
10,000年前	縄文時代	草創期		高畠町・日向洞穴 高畠町・一の沢B穴	
8,000		早期	土器片 表裏縄文土器	高畠町・尼子B跡 南陽市・笹田沢	
7,000		前期	住居址（1つ） 耳飾り（2つ） 土器片・石器多数	飯豊町・小白川 米沢市・松原	
6,000		中期	土器片・石器多数 陥穴遺構 住居址（5つ） 集石遺構・墓域	長井市・荒 長井市・館の越 長井市・長者屋	
5,000		後期	こぶつき土器	飯豊町・石 蒲 長井市・今 里	
4,000		晩期	土偶の一部 土器片 住居跡（1つ）	飯豊町・豊 島	
3,000	弥生時代		アメリカ型石鏃 土器片 墳墓跡	米沢市・八幡原 高畠町・館坂笹	国指定形作
2,000	古墳時代			南陽市・稲 荷 米沢市・戸塚山 古墳群	
1,000年前	歴史時代			川西町・渡 伝 長井市・台 山	

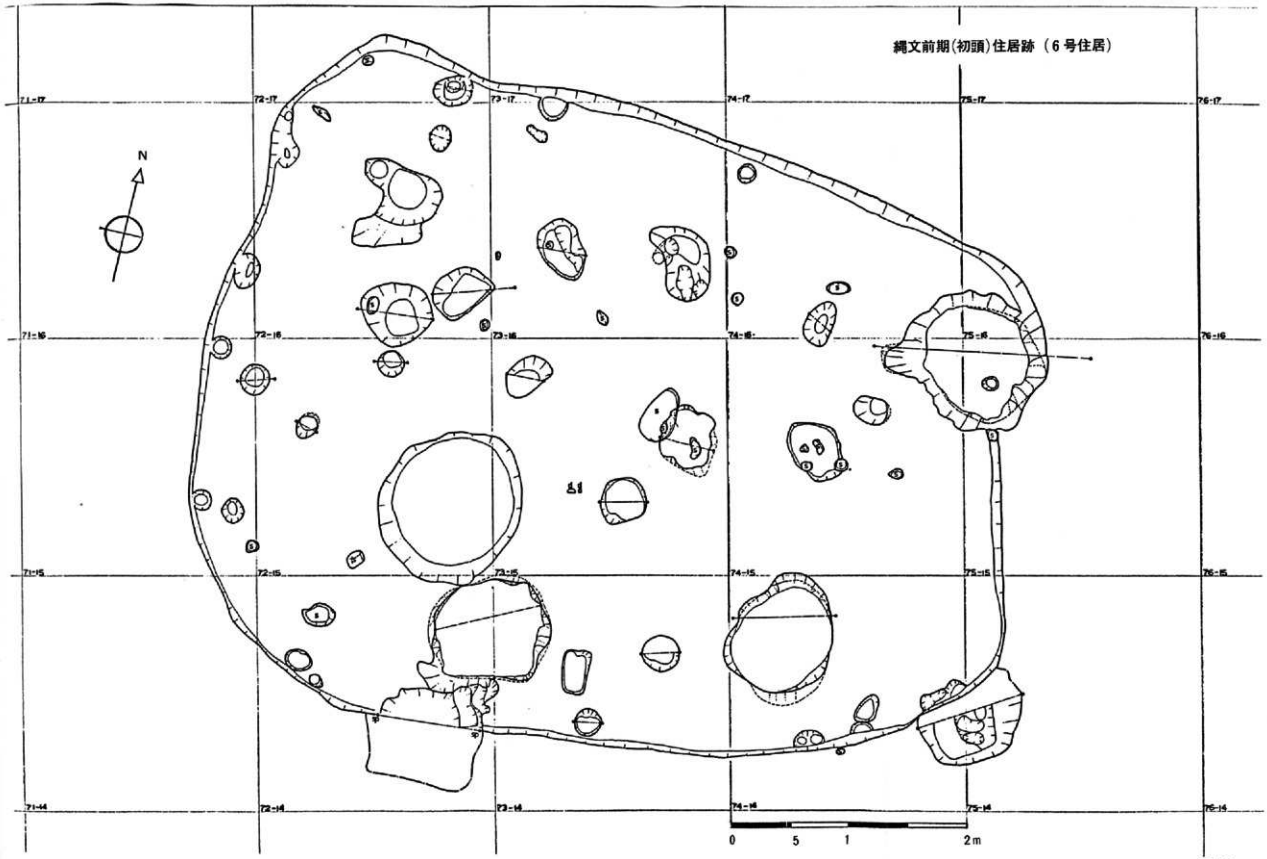
長者屋敷遺跡検出遺構配置図

昭和52、53、54年度調査

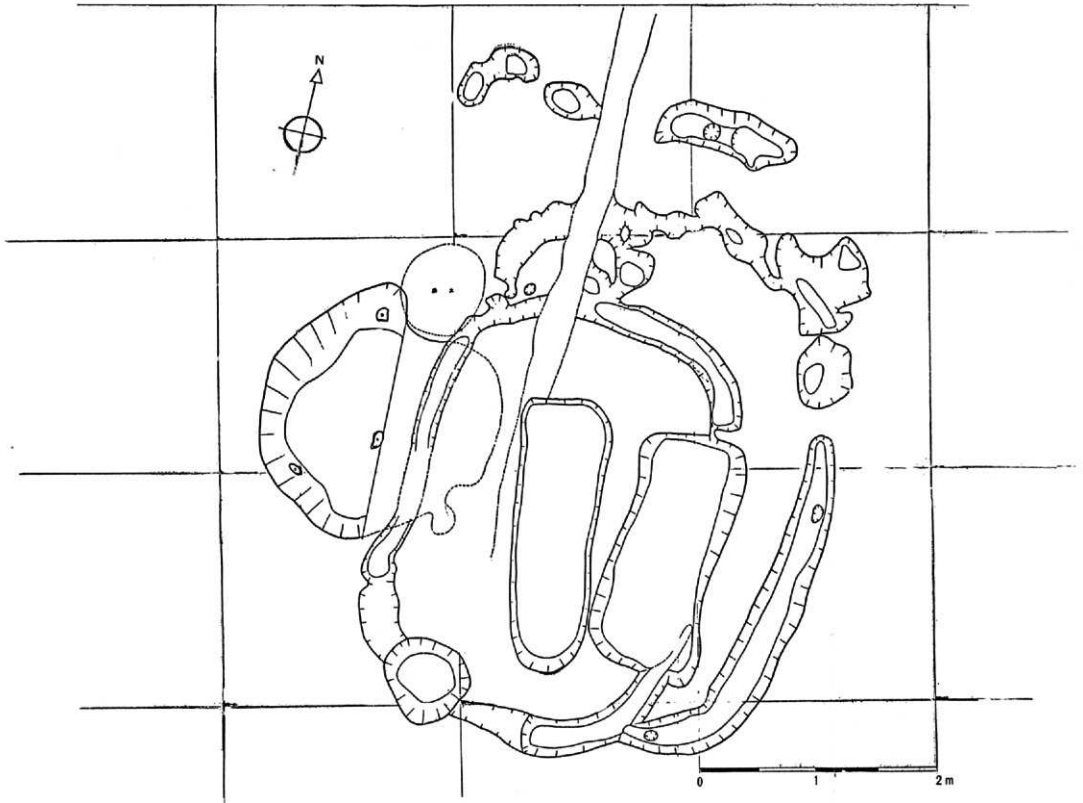


遺構略記号表			
例 ST d (住居跡・縄文前期)			
遺構名		時代	
SH	墳墓	a	旧石器時代
SK	土壙	b	縄文時代草創期
SL	炉	c	縄文時代早期
ST	竪穴住居	d	縄文時代前期
SP	ピット	e	縄文時代中期
SX	性格不明	f	縄文時代後期
SZ	集石	g	縄文時代晩期
		h	弥生時代
		x	時代不明

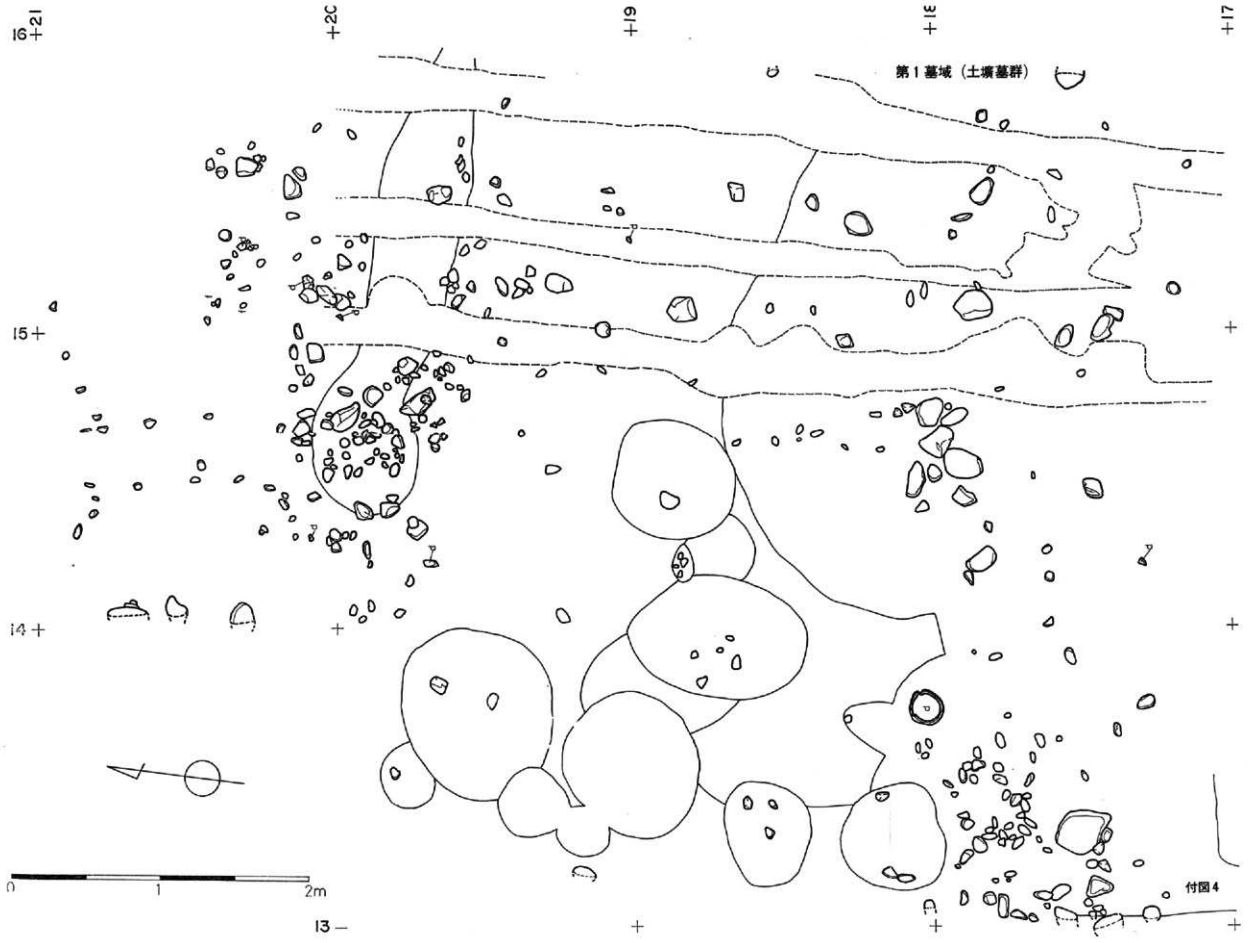
第3図検出遺構箇図



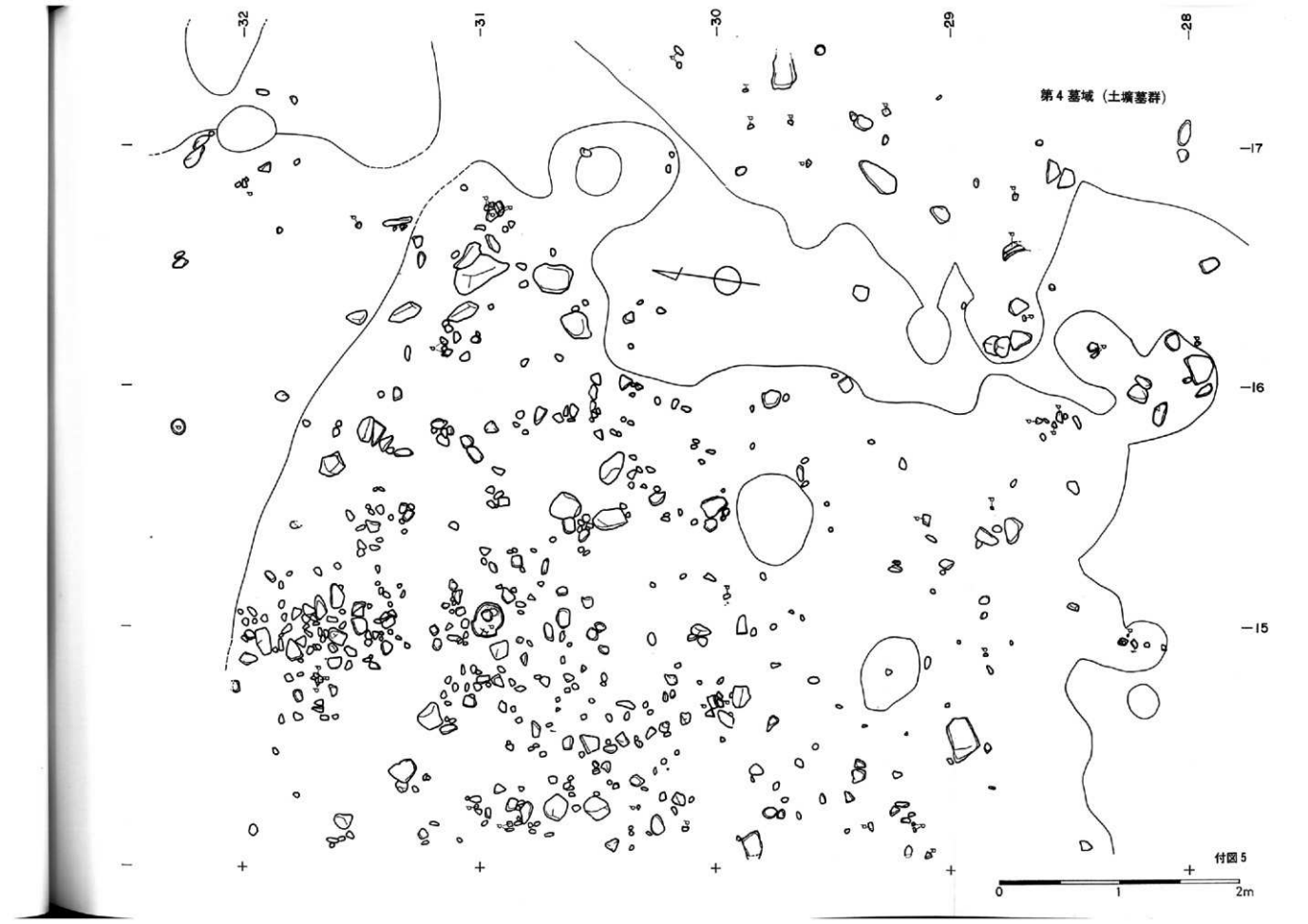
付図2



付図3

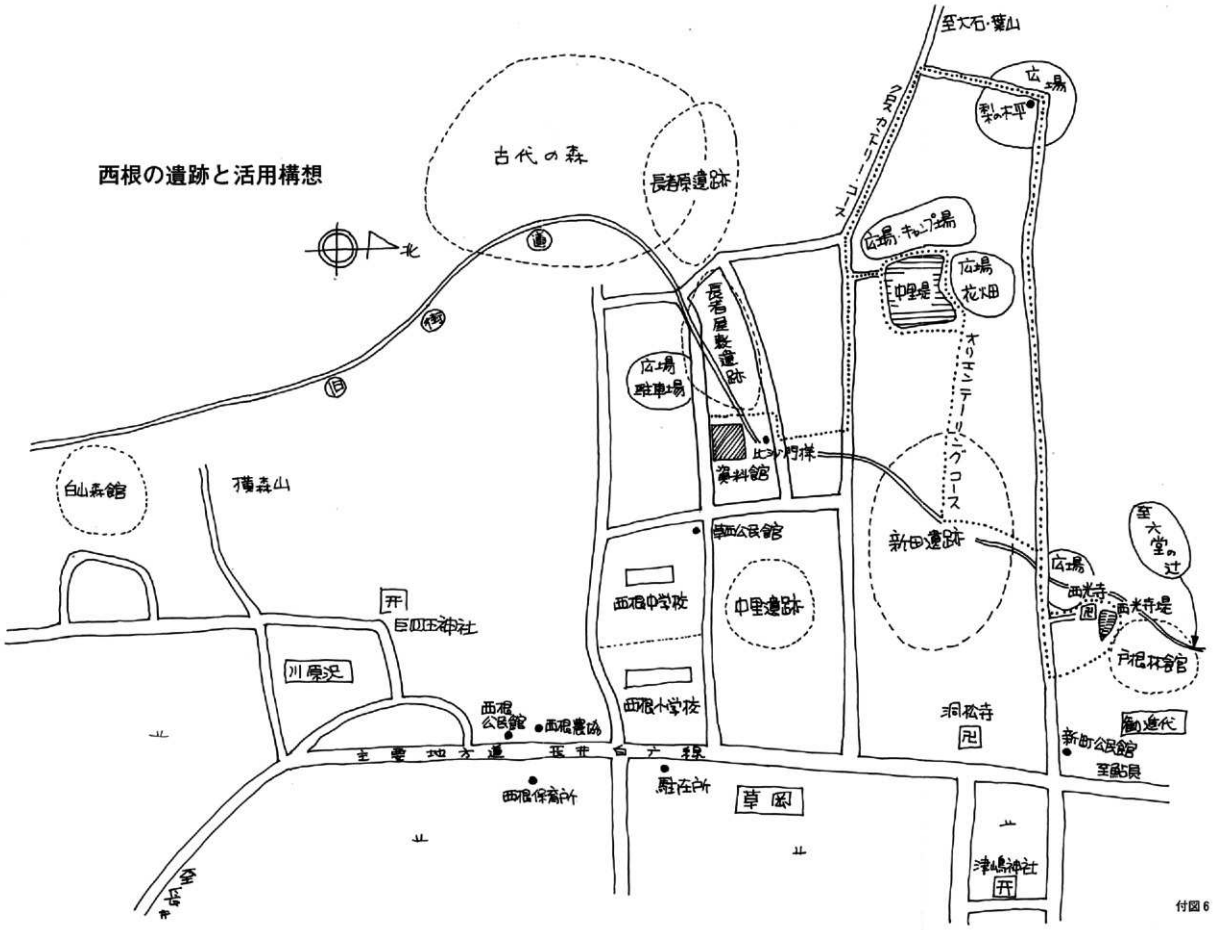


付図4



付図5

西根の遺跡と活用構想



付図6

前期住居跡

弥生期の墳墓　2基

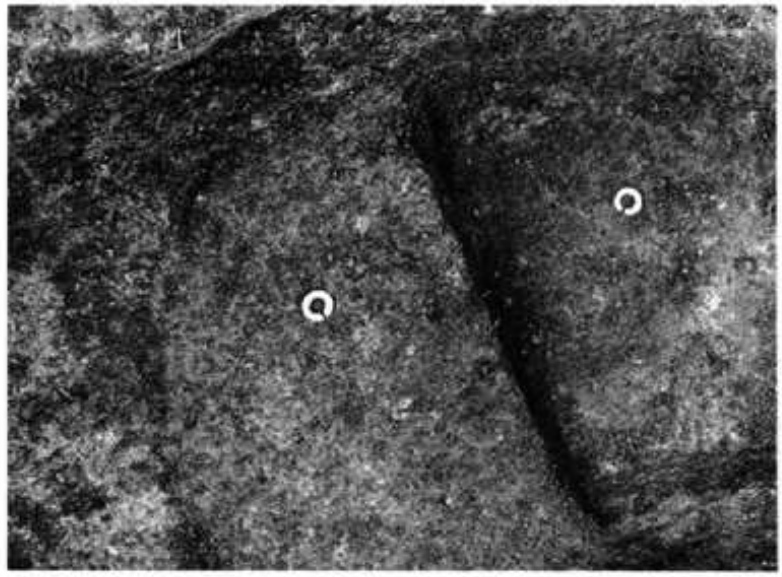
掻　　器

ナイフ形石器

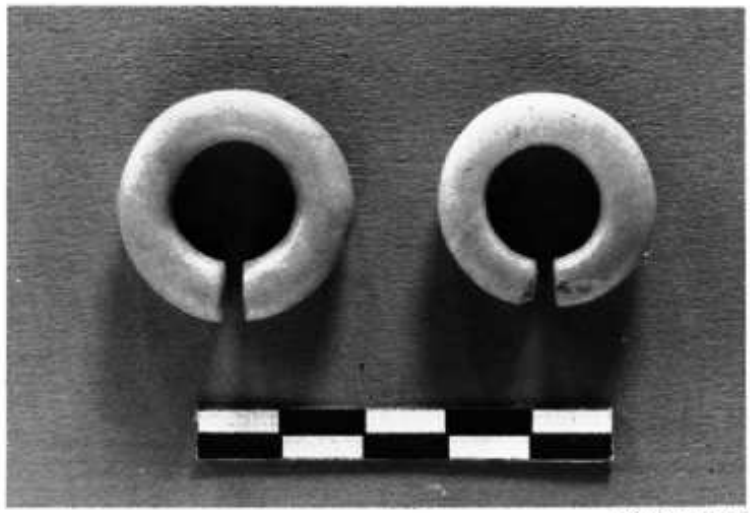
早期土器片

前期土器片

玦状耳飾出土状況



玦状耳飾出土状況



玦状耳飾

こぶ付土器片

土偶の一部とベンガラを塗った石

アメリカ型石鏃と弥生土器片

長者屋敷遺跡
第2次調査概報

昭和55年3月31日　印刷
昭和55年3月31日　発行
発行　長井市教育委員会
印刷　印刷の芳文社